短歌習作

宮本百合子

青空文庫

涙ぐみてうるむ瞳を足元に
　なぐれば小石うち笑みてあり
かんしやくを起しゝあとの淋しさに
　澄む大空をツク／〃＼と見る
ものたらぬ頬を舌にてふくらませ
　瓦ころがる抜け歯の音きく
うすらさむき秋の暮方なげやりに
　氷をかめば悲の湧く
角砂糖のくずるゝ音をそときけば
　若き心はうす笑する
首人形遠き京なるおもちや屋の
　店より我にとつぎ出しかな
はにかみてうす笑する我よめは
　孔雀の羽かげ髷のみを出す
物語り思ひ出つゝ我髪を
　切りて作りぬ細き指環を

生れ出て始めてふるゝ三味の糸
　うす黄の色のなつかしきかな

調子なき思のまゝをかきならす
　ざれたる心我はうれしき

そぼぬれし雄鳥のふと身ぶるひて
　空を見あぐる秋雨の日よ

秋の日をホロ〳〵と散る病葉の
　たゞその名のみなつかしきかな

気まぐれに紅の小布をはぬひつゝ
　お染を思ふうす青き日よ

泣きつかれうるむ乙女の瞳(め)の如し
　はかなく光る樫の落葉よ

蛇の目傘塗りし足駄の様もよし
　たゞ助六と云ふさへよければ

助六の紅の襦袢はなつかしや
　水色の衿かゝりてあれば

真夜中の鏡の中に我見れば

暗きかげより呪湧く如
呪はれて呪ひて見たき我思ひ
物語りめく折もあるかと
紫陽花のあせたる花に歌書きて
送りても見んさめたる心
カサ〳〵と落葉ふみつゝ思ひ見る
暗き中なる白き芽生へよ
我部屋の天井にある雨のしみ
磐若のかほの恐ろしきかな
何高が雨のしみとは思へども
頭の真上にあるが恐ろし
幼き日ざれ書したる片わきに
ペン〳〵草は押してありけり
色あせてみにくき花となりしかど
萩と云う名のすてがたきかな
雨晴れし後の雨だれきゝてあれば
かしらおのづとうなだるゝかな

ぜんまひの小毬をかゞる我指を
　見れば鹿の子を髪にのせたや
夜々ごとに来し豆売りは来ずなりぬ
　妻めとりぬと人の云ひたり
意志悪な小姑の如シク〳〵と
　いたむ虫歯に我はなやめり
亡き人のたまを迎へて鳴くと云ふ
　犬の遠吠我はおびへぬ
あるまゝにうつす鏡のにくらしき
　片頬ふくれしかほをのぞけば
　ひな勇を思ひ出して
ソトなでゝ涙ぐみけり青貝の
　螺鈿（らでん）の小箱光る悲しみ
紫のふくさに包み花道で
　もらひし小箱今はかたみよ
振長き京の舞子の口紅の
　うつりし扇なつかしきかな

姉妹の様やと云はれ喜びし
　京の舞子のひな勇と我れ
紫陽花のあせそむる頃別れ来て
　迎へし秋のかなしかりしよ
たゞ一人はかなく逝きしひな勇は
　いまはのきはに我名呼びきと
我名をば呼びきと低うくり返せば
　まぶたのうらは熱くなり行く
思ひ出でゝひな勇はんと低うよべば
　白粉の香のにほふ心地す
いつの世にか又めぐり会ふ折もあるかと
　螺鈿小箱を秘めておきけり

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集　第三十巻」新日本出版社
　　1986（昭和61）年3月20日初版発行
※底本解題の著者、大森寿恵子が、1913（大正2）年頃の執筆と推定する習作です。
入力：柴田卓治
校正：土屋隆
2008年2月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

短歌習作

宮本百合子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/